

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
平成29年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	企画・情報部 企画課 掛員
	氏 名	鶴房 匠子
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ
	研 修 先 機 関 名	京都大学 ASEAN 拠点
	研 修 期 間	平成29年4月7日～平成29年9月25日
具体的な研 修内容	1. 概要	<p>ASEAN 地域における研究・教育の支援、および、そのネットワーク構築のため、平成29年4月より6ヶ月間に渡り、ASEAN 拠点運営に携わった。ジョン万プログラムで派遣された職員としては、通算10人目となる。</p> <p>従事した主な業務は、会計業務（拠点オフィスの家賃や光熱費等の支払い、タクシー代や高速代の支払いなどを含む仮払金の管理）、出張手続き（拠点スタッフのフライト手配や出張後の精算処理）、勤怠管理（拠点所長、現地スタッフや清掃員）、来客対応などであった。</p> <p>それらに加えて、第三国や国内の他の地域で行われる研究・教育関連イベント（マレーシア・東南アジアネットワークフォーラム、留学フェア、在タイ大学連絡会）への参加等、多数の活動にも従事した。また、語学学校にて英語とタイ語を学び、外国語の習得にも努めた。</p>
	2. ASEAN 拠点運営業務	<p>ASEAN 拠点の構成員は、拠点所長、URA 職員、本プログラムにおいて派遣される事務職員の日本人3名と、タイ人スタッフ1名の計4名であった。</p> <p>立替払が中心の欧州拠点とは異なり、ASEAN 拠点では、オフィス賃料の支払いから日々の消耗品の購入に至るまで、大学本部から送金される仮払金による対応が必要であった。多額の現金の管理や小数点以下の切り上げや切り下げといったタイの商習慣を把握した上での処理など、ASEAN 拠点ならではの対応に苦心した。</p> <p>来客対応は頻繁にあり、ほぼ毎日のように対応した。学内外の研究者や学生が、研究についての相談や打ち合わせのために来訪することが多かったが、ASEAN 拠点の最大の特徴は、他大学の事務職員による日本からの訪問が多いことである。約50校の日本の大学が、既にバンコクに進出しているが、その形態は様々である。現地スタッフのみ、</p>

または、研究者のみの駐在という大学も多く、本学の ASEAN 拠点のような充実した人員や体制で活発な活動を行っている大学は稀である。そのため、拠点の事務職員がどのような業務に携わっているか知るために来訪する方が多かった。

その他にも、拠点の情報通信ネットワーク環境の整備や、その契約更新、現地スタッフの雇用契約の更新なども担当した。タイでは落雷による停電等が原因で、情報通信ネットワークに障害が生じることが度々あった。日本ではこのような経験がほとんどなく、仮に発生した場合でも、担当部署が迅速に処理するため、自らで対応することはなかった。しかし、ASEAN 拠点では、スタッフが自力で復旧させなければならぬため、各自がネットワーク構造をある程度理解する必要がある、ネットワーク障害の際にはスタッフ総出で機器の点検や業者への連絡を行い、復旧に努めた。

また、現地スタッフの雇用契約の更新に際しては、昇給を検討するにあたり、他大学に現地スタッフの給与に関してヒアリングを行い、現地の給与相場等の労働環境について調査した。一定の相場は存在するものの、各大学でスタッフが担当している業務や能力等も異なるため、一概に比較することは難しく、また、日本とタイの物価の違いも考慮する必要があった。現地スタッフがモチベーションを維持して業務に臨める金額の算出は非常に難しかったが、貴重な経験となった。

3. イベントへの出席や出張等

(1) 留学説明会への参加

任期中に開催された大きな留学フェアとしては、i)毎年6月に日本大使館にて開催される、通称 JUNE FAIR と、ii)9月にチェンマイおよびバンコクで開催された JASSO 主催の留学フェアであった。それ以外にも、iii) Mahidol Wittayanusorn School 高校、iv) Triam Udom Suksa School、v) KVIS の3校に個別に高校訪問を行い、京都大学の紹介および留学相談を実施した。

i) JUNE FAIR

2017年6月5日～9日に開催された本フェアが、ASEAN 拠点に赴任して初めて参加した留学フェアであった。本学に職員として採用されて以来これまで、留学フェアに参加した経験はなく、知識も直前の学習のみで不安な気持ちで臨んだが、本部より留学フェア経験が豊富なスタッフの応援もあり、ブースの設置、学生や保護者へ

の質問対応など、基本的なことから学ぶことができた。

本フェアは、大使館で奨学金の申請が受け付けられていた時期であったため、その帰りに立ち寄る学生も多く、具体的な日本留学のビジョンを持って参加していた学生が多かった。奨学金の申請資格を満たすためには、ある程度高い学力が必要となるため、優秀な留学生をリクルートするには最適な場であると感じた。本学ブースにおける個別相談は、自分にとって、日本や京都大学へ留学を希望する学生と接する最初の機会であった。学生と直接話をする中で、少しでも留学の力になりたい、少しでも多くの人に京都大学を知ってもらいたいという気持ちが喚起された。

ii) JASSO 主催の留学フェア

2017年9月2日にチェンマイ、同3日にバンコクで開催された本フェアは、来場者数がそれぞれ、874人(チェンマイ)、2,724人(バンコク)であり、非常に大規模であった。具体的に本学への留学を検討し、コースの詳細について質問する学生もいたが、大多数は色々な大学のブースを訪問し、日本の大学について情報収集を行っているようであった。実際の留学に繋がる可能性は必ずしも高くはないが、日本の大学や語学学校など約80機関が参加している中で、京都大学のタイにおける存在感をアピールする、広報活動の一環としては非常に重要な機会であると感じた。また、普段はタイに駐在していない他大学の国際担当のスタッフと様々な情報を交換できる機会でもあり、大学間ネットワーク構築の観点からも非常に有意義であった。

iii) Mahidol Wittayanusorn School 高校

5月14日に開催された留学フェアに、現地スタッフ、拠点所長、本部スタッフと共に参加した。マヒドン(Mahidol)大学は、本学と、大学間交流協定や部局間学術交流協定を締結しており、本学とは非常に活発な交流を行っている大学である。その附属高校である Mahidol Wittayanusorn School が独自に開催した本フェアには、日本だけでなく、ドイツや韓国の留学エージェントなども参加していた。

iv) Triam Udom Suksa School

平成29年5月23日に、在タイ日本大使館が奨学金の説明のために訪問する際に同行し、訪問させて頂いた。タイには公式の高校ランキングはないものの、Triam Udom Suksa School はタイにおける最高峰と言われる高校である。大使館による学生への奨学金の説明の

後、教頭や進路指導チームの教員と会話をする時間を取って頂いた。これまで訪問した高校では、英語でコミュニケーションをとることが多かったが、Triam Udom Suksa School では主としてタイ語が使用されるため、当校の日本語を話せる教員がタイ語に翻訳する形式で、ディスカッションが進んだ。

継続的に文部科学省の奨学金合格者を輩出している高校でもあり、毎年必ず数名は日本の大学に留学していることから、継続的に交流を行い、本学への留学生の獲得に繋げていく努力が必要であると感じた。

v)KVIS

在タイ日本大使館、および、日本の大学3校と共に訪問し、文部科学省奨学金の説明、各大学の紹介、および、ブース設置による留学相談を実施した。KVIS は、2015 年に開校したばかりの高校ではあるが、非常に学力が高いとされている。KVIS は、積極的に留学情報を収集して生徒に紹介しており、また、本学に留学経験のあるマネジメントスタッフがいることから、本学への留学に興味を持ってもらいやすい環境であるように感じた。

(2)東南アジアネットワークフォーラムへの参加、および、マラヤ大学への訪問 (マレーシア)

2017年8月8日に、マレーシアのプトラジャヤにて開催された、マレーシア国民大学(UKM)と京都大学マレーシア人同窓会(MyKYOTO)主催の本フォーラムへ、ASEAN 拠点より URA1 名と共に出席した。

本フォーラムの前には、京都大学と UKM との MOU 調印式も行われた。また、終了後には、MyKYOTO の方々と国際高等教育院の教員を中心に、マレーシアの高等教育についての情報交換や、京都大学の新たな留学プログラムに関する意見交換が行われた。

日本では留学生支援業務に携わった経験がなかったため、同じ東南アジアでも、マレーシアとタイでは教育制度が異なっている事等を認識していなかった。それゆえ、自分の知識獲得に有用であったと同時に、留学プログラムを企画することの難しさを痛感した。また、このような海外での調印式やフォーラムへの初参加という状況に加えて、フォーラムに参加されていたアブドゥラ・アフマッド・バダウィ・マレーシア前首相にお会いできたことは、大変貴重な経験となった。

本フォーラムで非常に印象的だったのは、マレーシア人同窓会の方々が、本学との交流イベントに非常に熱心に取り組んでおられるこ

と、および、日本人の現地同窓会とも良好な関係を築いておられた点である。京都の地を離れた海外でも、京都大学のネットワークが確立されており、活発な活動が行われていることを改めて認識した。

フォーラムの翌日には、URAの方とマラヤ大学の研究支援関連部署を訪問し、本学とマラヤ大学がそれぞれに、大学や国際研究連携活動について説明を行った。その際に、ジョン万プログラムの研修の一環として、URAの方の取り計らいの下、英語でプレゼンテーションを行う機会を頂戴し、10分程度で本学の概要を説明した。短時間の簡単なものではあったが、英語で本学について紹介を行うのは初めてのことであり、事前に通っていた語学学校で英文原稿をチェックしてもらうなど、準備も含めて非常に大変であったが、拙い英語であっても人前で話す度胸が少しは身に付いたように思う。

4. 業務時間外の取り組み ～タイ語および英語の学習～

拠点業務に従事するにあたり、また現地で生活するにあたって、タイ語および英語の必要性を感じ、語学学校に通って、両語を学んだ。現地スタッフは、簡単な日本語であれば理解できるものの、コミュニケーションの中心は英語であった。現地スタッフは英語が非常に堪能であり、また、業務遂行能力も高いことから、こちらがいかに英語で正確かつ詳細な指示を出し、質の高いコミュニケーションを図れるかが、拠点の業務を効率的に進める上で重要なポイントの一つであると感じた。英語学習に励み、語学力を高めたことで、現地スタッフとより良好な関係を築くことができた。

また、日常生活においても、バンコクは大都市であるとはいえ、やはり英語が通じる店舗やタクシーなどは、まだ少数であった。身振りや手振りだけでも生活自体は可能であったが、交通手段や食事、買い物を選択肢を増やす等、生活の質を高めるためには、片言であってもタイ語が必要と感じる場面が多々あった。タイ語と英語の2言語を同時に学習することは、時間的にも体力的にも相当厳しかったが、タイ語を学習することで、語学のみならず、タイ語教師ともタイの文化などについて話す機会に恵まれ、タイへの理解を深めることに有益であった。

本学の国際

京都大学では現在、研究、教育、国際貢献のそれぞれの分野において、

<p>化に対する 研修成果の 活用方法・フ ィードバッ ク</p>	<p>具体的な国際化の目標が掲げられている。国際化を推進していくためには、研究者や学生のみならず、職員の国際化が不可欠である。その職員の国際化の取り組みの一環であるジョン万プログラムに参加し、そこで得た成果を振り返りながら、今後の本学での業務における活用を考えてみる。</p> <p>まず、半年間の研修を通じて得たものは語学力、人的ネットワーク、臨機応変な対応力である。</p> <p>現地スタッフへの業務の指示や連絡は、ジョン万職員が行うことが多かったため、英語での高いコミュニケーション能力が求められた。当初は思うように詳細を伝えられず、業務を自ら抱え込んでしまうこともあったが、語学力を高めると共に、業務時間外も積極的にコミュニケーションを図るように努め、滞在期間終盤には、やり取りが円滑になり、業務を効率的に進めていくことができるようになった。国際化を推進する上で基本となる英語力は、今後どの部局、どの業務に携わるにおいても、必須であると考えられる。タイ語に関しては、半年で習得できるレベルには限界があったものの、挨拶程度であっても、タイ語で話しかけることで、人々の態度が非常に友好的になることを実感した。片言でもその土地の言語を学ぶことは大切である。今後、海外の大学、学術機関等と交流する際には、相手との良好な関係を築く上で、相手の文化の一部である「言語」を尊重する姿勢が肝要であると思われる。</p> <p>つぎに、人的ネットワークについてである。半年間の滞在の中で、バンコクに駐在している日本の他大学や学術機関のスタッフ、現地スタッフ、現地の大学関係者との交流の機会に多く恵まれた。タイという友好的でのんびりした土地柄のせいもあってか、誰もが非常に気さくで、タイにおける学術動向やシンポジウムの相談などの業務に関する話題から、観光や買い物などのプライベートな話題まで、幅広く話し合える人間関係を構築することができた。また、既に何年も現地に駐在していたり、企業での勤務経験があったり等、出会う人々の経歴は様々で、知識や経験の豊富さに刺激や影響を受け、半年という限られた時間を有意義なものにすることに繋がった。このような人々との出会いは、今後の自分の人生においてかけがえのない財産であると同時に、今後の本学での業務においても、他大学の情報収集や他大学と共同でプロジェクトやイベントを行う際などに貢献するものと思われる。</p> <p>臨機応変な対応力については、タイでは、停電やネットワーク障害、スコールによる浸水、慣れない土地での暮らしによる突然の体調不良など、不測の事態に見舞われることが多々あった。その都度、インフラ設備や交通事情等、日本との違いを実感すると同時に、拠点スタッフで相談しながら</p>
---	--

ら最善の方法を検討した。このような経験を積み重ねることにより、いかなる場面でも臨機応変に、自分を取り得る最善の方法を冷静に考える習慣が身に付いたと感じている。そのように前向きに解決策を検討できるようになったのは、経験の積み重ねだけでなく、タイ特有の“マイペンライ”、つまり「大丈夫、何とかなる」という精神の恩恵でもあると言える。

当初、私がこの研修を志望した理由は、将来的に、国際関係の部署で、京都大学の国際化に携わりたいと希望していたためであった。その気持ちは今も変わらず持ち続けているが、今回の研修成果はさらに広く活用できるものであると考えている。帰国後、北部構内事務部の研究推進に携わる部署へ配属となり、無償の共同研究契約や研究試料の移転に関する契約（MTA）などを担当することとなった。一見したところ国際業務とは無関係に思われるが、英文契約が一定数あり、場合によっては先方と英文メールで契約書の内容を調整したり、研究者から至急で処理を求められたりすることがある。現在の業務を担当して気付いたことは、国際化が進むにつれ、国際業務はどの部局、どの業務においても日常的に発生してきているという事実である。割合としては、まだそれほど大きくないが、今後は確実に増加することが予想される。それに伴い、職員の国際業務対応もいっそう求められるだろう。

現状においては、部局間レベルでの海外との学術協定や、個々の研究者の海外との共同研究契約、MTA の締結等、部局レベルにおいても国際化が進んでいる現状を踏まえ、担当案件を一つ一つ正確に、迅速に進めていくことで、所属部局から京都大学の国際化に貢献したいと考えている。

最後に、ASEAN 拠点にて半年間の研修という大変貴重な機会を頂けたことに心から感謝するとともに、今後自分がいかなる業務に携わっても、国際化をはじめとした本学の様々な活動に貢献できる人材となれるよう、今回の研修で得られた様々な成果を活用し、培った能力を発揮していきたい。